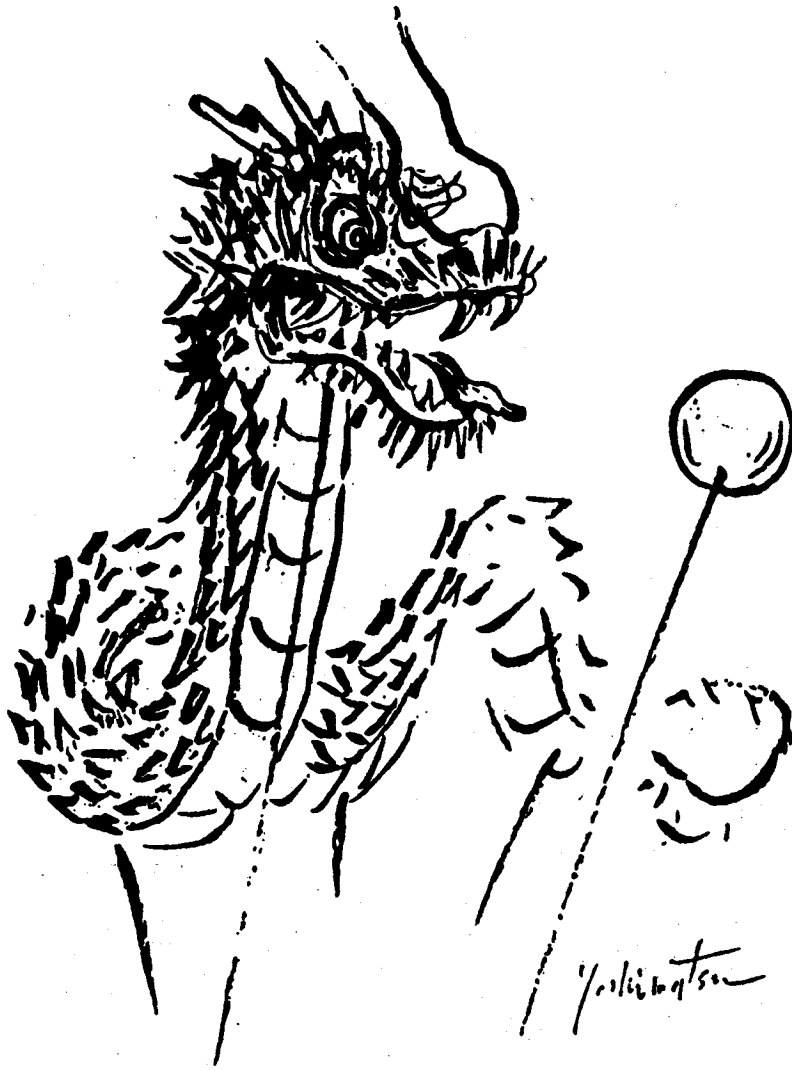


いしだたみ



長崎南高関西同窓会報

VOL. 6

☆ 第6号発行によせて ☆

ぐらぐらどかんと来て家も物もひっくり返し、多くの命まで奪いさった阪神大震災から早くも7ヶ月がすぎようとしています。前回の特集号ではとりあえずということで臨時ニュースを送りました。今回は阪神大震災にくじけず頑張る同窓生の激励と交歓の場ということで第5回総会の案内を始めとする会報を送ります。

阪神大震災の後の初めての総会ということで同窓会員の方それぞれに特別の思いのこもるものと思います。色々な思いを多くの人と共有することが出来るように、そして同窓生の交流の輪と絆が少しでも広く強くなりますようにと願いを込めて「いしだたみ」を送ります。総会には是非ご出席下さい。

長崎南高関西同窓会総会の御案内

第5回総会を下記のとおり開催いたします

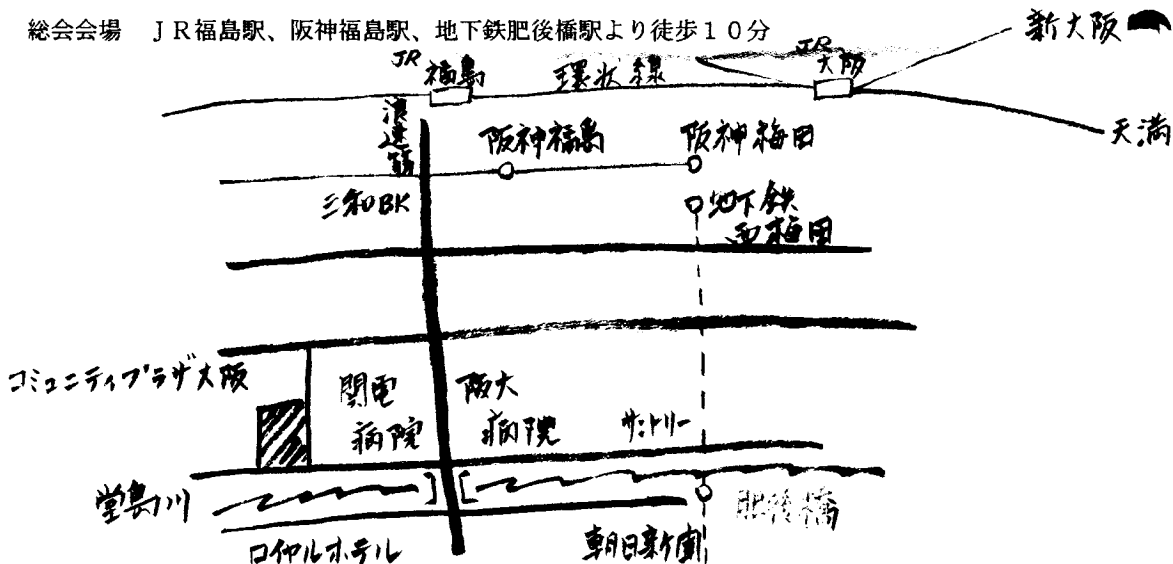
とき 1995年 9月30日(土曜日) 午後4時～午後6時

ところ コミュニティプラザ大阪 3Fホール
大阪市福島区福島3丁目1-73
電話 06-454-1153 (代表)

かいひ	男性	10,000円	} 年会費2,000円を含みます
	女性	8,000円	
	学生	5,000円	

招待恩師 藤田 光 先生 (地学) S38～S54 在勤
中田 秀夫 先生 (国語) S40～S56 在勤 (現長崎南高校長)

総会会場 JR福島駅、阪神福島駅、地下鉄肥後橋駅より徒歩10分



震災で娘を失って

芦屋市立岩園小学校 植松 なおみ

(旧姓：末続 5回卒)

この度の地震で被災しました後、たくさんの方々の暖かい励ましを受けました。懐かしい名前、忘れかけていたお名前も見つけました。すべて私の歴史でした。

私たち家族が、芦屋の町で作り続けてきた歴史、娘を含めて家族5人で作ってきた歴史が終わりました。

当日、我が家は、一瞬にして崩れ落ちてしまいました。次女が一人真っ暗な中で外に飛び出し、家族の名前を呼んでくれました。その声に励まされ、私も外に這い出る事ができました。しかし長女(素)だけは声がかえってきませんでした。うつ伏せのままぐったりしておりました。顔を上向かせた時私は、「起きなさい。こんな大事な時に何時まで寝ているの」と必死で起こしていました。事の重大さにはまだ気が付きませんでした。傷一つなく眠ったままの顔でしたから。人工呼吸、心臓マッサージを続けながら、病院へ運びました。病院の中は、電気もきれており真っ暗な状態で、すでに30人程の方が廊下で治療されていました。素も廊下で看護婦さんの指導を受けながら、心臓マッサージを続ける状態でした。生まれた時から目元のはっきりした娘でした。その目元から光が無くなるのを見続けながら、マッサージを続けました。医者^の診断を待つ前に、自分でマッサージの手を止めていました。もうこれ以上娘に頑張らせなくてもいいと思いました。すでにマッサージの勢いで、肋骨は折れていました。私はそれ以上続けることはできな^らった。娘を助けることはできな^かった。私のほうが先に諦めてしまった。一番好きだった娘の目が、私を見なくなるのに耐えられな^かった。「もう、いいよ」と言ってしまった。早く目を閉じさせてやりた^かった。娘の目を閉じさせたとき、ほっとしていた。それ以上は何もできないと思った。娘がもっと生きてが^らっていたらうなんて考えな^かった。自分のことしか考えな^かった。自分の辛さから逃れた^かった。娘が頑張れな^かったのではなく、自分が頑張れな^かった。もう力が出せな^かった。大声を出して泣くこともできな^かった。涙だけが止めもなくで^きた。傍らについておられた看護婦さんも一緒に泣いてくださいました。娘が将来の仕事としてみつけていた看護婦さんに見守られたことは、悲しくもあり救いでもありました。死亡に関する諸手続きに時間が

かかり、娘は、遺体安置所で5日間を過ごすことになりました。

夫の両親と残った2人の子供を安全な所へ避難させることも、私達夫婦にとって大事な仕事となりました。義父はショックで意識が錯綜してしまったような状態になりました。小学校3年生の息子は17日の夜は一晚中私にしがみついて震えていました。ひとまず夫が両親と子供を小野市の姉夫婦の元へ連れて行くことにしました。しかし、安置所に娘一人を残して行くことがどうしてもできなくて、私一人は芦屋に残りました。安置所は静かに娘と対話できる場所ではありませんでした。次々と運ばれてくる遺体の置き場を作るための作業が始っていました。柩に収めてくださる方々も丁寧にしてくださいました。ありがたいと思いながらも、その場に居続けることは苦痛でした。前田町の避難所に一人で帰る勇氣もなく、そのまま勤め先の学校に行きました。学校も避難所になっていて、しなければならないことが山ほどありました。娘を亡くした母親が、翌日から仕事をしていたこと^でいろいろな事を言われました。「さすが、先生だ」、「がんばりすぎないで」、「家族の事を大事にすべきだ」、「すぐ家に帰るべきだ」、「残った子供のことを考えるべきだ」、「あまりにも仕事熱心で腹が立つ。もっと悲しむべきだ」...

私は娘の所に残りた^かっただけでした。学校の仕事はいわば情性でやれる仕事でした。みんなが困っていた。不安がっていた。怖がっていた。助けを求めてくる方に、できる事でお手伝いすることは、あまり考えることもなくできました。その合間に娘に逢いに行^ってました。私にとって重要な仕事は娘に逢うこと^でしたから。

そのうち、22日に娘を斎場につれてゆくとの連絡が、安置所に入りました。今から思うと限界に近い状態だった^と思います。21日には学校の職員もだいぶ増えていました。はじめから来ていたメンバーとは違う新しい人達が動き始めていました。思えば初めから来ていた職員は、みんな帰る場所を無くし、人を求めて集まった者ばかり^でした。地震により直接痛手を受けたものと、地震により不便さを感じたものとの意識のずれは、どうすることもできないもの^のようです。新しいメンバーによって避難所の中も組織的に動くよう^になりました。「もう私達の出番はなくな^った」と感じたのは、私一人ではな^かった^ようです。私は電話を取る仕事さえま^ともにできなくな^ってきていました。職員室の中にも明るさがで^て

きて、時には甲高い笑い声さえあがるようになっていました。とてもいい事だと言いつつ聞かせながら、叫び声をあげそうになる自分がいました。行き場のない淋しさを感じながら、娘の所に逃げ込んだものです。それから後の私は、長い間お世話される側に回っていました。

柩のなかの娘に飾る花がありませんでした。道端の垣根に咲いていた真っ赤な山茶花の花では、娘には似合いませんでした。小野市にいる夫に連絡し、スイトピーを

中心としたかわいい花束を用意してもらいました。友人は、学校の庭に咲いているパンジーで飾ってくれました。娘が一番似合う花になりました。春になるたびに思い出すでしょう。斎場は四条暖市の山奥でした。私達夫婦2人だけで見送りました。

5人で作り続けてきた歴史が終わり、これからは4人で作りなおさねばなりません。とても怖くて前に進む勇気が出てきません。(95年3月)

普賢岳より

岩永 久子 (旧姓：山口 6回卒)

長崎南高関西同窓会の皆様よりたくさんのお見舞いを頂き、ほんとうにありがとうございました。南高卒業生というだけで、私個人に暖かい激励をいただき、驚きと感激で胸がいっぱいです。ありがたく頂戴いたします。普賢岳が最初の煙を揚げたのは、5年前の11月17日、娘の15才の誕生日でしたので忘れもいたしません。あの時は、こんな事態になるうとは思ってもよらず、「山もお祝いしてくれてるのよ」などと冗談を言っていました。でも翌年の6月3日の大規模火砕流発生から、島原、深江の苦難の日々が始まったのです。

火柱が闇の中に怒り狂う山の姿を浮かび上がらせ、火砕流で焼ける家々の火が夜空を赤く染め、眠れぬ夜が繰り返され、また雨の後の土石流は、家も道路も川も押し流し、ただ山から海まで続く土石の間に二階の屋根がわずかにそこに家があったことを物語っているだけでした。通学路はとぎれ、子供たちは船にのったり山ごえしたりで、急な土石流の時は、夜の10時になっても帰ってこない日がありました。もし子供が学校にいつている時に大地震があれば、親子があえなくなるかもしれないと、不安の日々でした。

幸いにも我家はまだ自宅で生活できております。家を

なくされた方々は、本当にお気の毒だと思います。ただ自宅で生活する者には、どんなに収入が減っても、~~い~~と援助がありません。我家も噴火から2年は灰にまみれながらタバコを作っていました。実収入は平年の1/4に止まり、生活が成り立たずタバコ作りをあきらめました。町内でも2番目に広い耕作面積を持ち、長男が高校を卒業したら、親子3人で3ヘクタールを目標にと、機械、施設など投資したばかりでした。

一昨年までは火砕流も多く、いつ災難になるかわからないので、長男は県外へ就職し、次男の学費を送金してくれています。長女も昨年からは働きながら看護婦学校へ行っております。私達も頑張らねばと、降灰対策としてアスパラガスのハウス栽培を始めました。一昨年は台風でハウスは飛ばされ収入にはなりません。でもあきらめず、ハウスを立て直し、アスパラの手入れをし、昨年はなんとか生活費を得ることができました。その間、主人はダンプの運転手をしながら山を切り開き、~~120~~0坪の敷地に牛舎を建て、~~肉牛120頭と繁殖牛50頭~~頭を入れました。数千万円の借金からのスタートです。

私はめげそうになるといつも「理想は高く、気魄と情熱に燃えよ」と声をだして言っています。人生だれも先のことはわからないものです。でも常に目標に向かって一歩ずつでも進んで行きたいと思います。

皆様方の応援があると思えば、ますます頑張れます。本当にありがとうございました。

部活だより

長崎南高女子バスケット部顧問

吉賀 勝幸

バスケット部は、男子は植生先生の下部員38名とたいへん多く、鳥取インターハイを目標とし、「走破」というテーマを置き、毎日頑張っています。チームの特色は、身長が小さいので、走るバスケットディフェンスを頑張り速攻をを主体に攻め、1対1でまけないようにしています。また、スリーポイント・シュートをみんながうめるようにしています。

女子は、吉賀先生の下部員16名と少なめで、ほとんどが1年生なので、技術的に未熟でまだまだスタミナも足りないので、チームプレイがなかなかうまくいきませんが、日頃の練習で個人個人のプレイを磨き、チームワークをつけるよう頑張っています。また、男子と同様身長の低いチームなので、走れるバスケットを目指しています。

練習中は厳しく注意しあってプレイの向上、精神的にも強い選手を作り、また、この学校のモットーである学習と部活動の両立に関しても男女とも頑張っています。

長崎南高地学部顧問

川原 和博

南高創立から10年間は1クラス50名、1学年13クラスという時期もあり、校内は生徒で溢れていました。現在は1クラス42~45名、1学年10~11クラスです。教師も生徒もかつての2/3程度になりました。生徒数は減ってもクラブ数は減らず、部員の取り合いになっています。人気のあるバスケットやサッカー、放送、

ブラスバンド等に生徒は集まりますが、理科の各部は存続も危ぶまれる程の青息吐息の状態です。活動が真面目で暗いというのが、部員の集まらない理由だそうです。また、昔は理科の4科目必修だったのが、現在は2科目でも選択でよい(文系)ことが原因の一つかもしれません。

それでも、毎年数名の生徒が地学部に入部してきます。ほとんどが天体大好き人間です。校舎の屋上で惑星の観望会やペルセウス座流星群の観測会をしています。また、長崎港外の伊王島で貝化石を採取したり、太陽黒点の観測をしたり、気象観測をしています。文化祭では研究成果を展示したり、ミニプラネタリウムで星座を投影しています。

今年は応募しなかったのですが、毎年、成果は日本学生科学賞に出品しています。今後は海洋汚染をテーマに漂着物の調査を計画しています。

地学部のOB会も活発で1昨年は藤田先生、今年は堀口先生の御退職記念の講演会を開きました。親睦会では今までの顧問もすべて参加し盛況でした。また、OB会から現部員に活動費として奨学金まで頂きました。OBのなかには地質学で博士号を取られた方や、天文学で大学院の博士課程に進んでおられる方がいらっしゃいます。アマチュアですが、オーロラや皆既日食の観測のため世界を飛び回っている方もおられます。

A棟の屋上の風力計と風速計が30年ぶりに新しくなりました。雨量計も新たに設置されました。これらの観測が地学教室からできます。創立50年には校舎も新しくなるでしょうから(?)、それまで気象情報の蓄積に力をそそぎます。

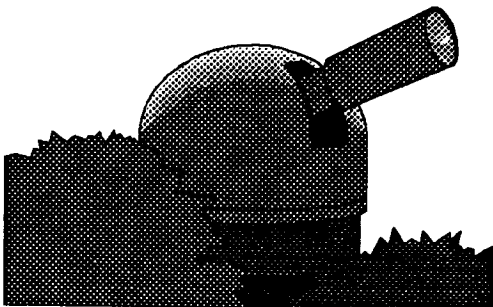
☆

☆

☆

☆

☆



45才の青春、実感！

太田 千賀子 (旧姓：三輪 4回生)

長崎では、秋の大祭「おくんち」の踊りの出し物の練習も、仕上げに入った9月半ば、大阪行きの車中の人となった私。長崎の総会はお盆に開催されるため、いつも参加できない私なのに、あまたの誘惑についノコノコと関西のお集まりにで出かけてしまいました。

私は1967年卒業の4回生なので、先輩方も今と違ってはそんなに年の差は感じないでしょうし、むしろ最近卒業された皆さんの若さに圧倒されるであろうと予想しての参加でした。遠く故郷を離れて、いわば本当の意味で自立して関西で人生を送っていらっしゃる皆様方へ、ささやかなエールを送りたい気持ちもありました。

早めに大阪に着き、一人気ままにあちこちを見て歩き、会場へも余裕をもって入りました。会場入口で早速同年の人に会い、あまりの変わらなさにびっくり。女性は総じて若い！主婦専業の人、自分の仕事をバリバリこなしている人、ご主人をなくされて一人でがんばっている人、それぞれにパワーがあって皆生き生き。高校の頃と少し印象が変わった方もいらっしゃいましたが、それはしっかり自分の生活をもっている確かさでした。長崎で親や友人がずっといる土地で暮らしていると、やはり甘えがあります。特に子供が幼い頃は自分の親をつい頼ってしまいがちでしたし、私など今でも実家へ行ったり来たり。いくつになっても私自身が親離れしていないことを感じました。

若く美しい女性たちに比べ男性諸氏は「七人の敵」の苦勞もおりななのでしょう。髪の毛の後退や、反比例するかの様な体格の豊かさに、ジーツと見つめてやっとなたか判明する例もかなりあり、爆笑、苦笑いがあちこちでおこりました。それでも皆さん、暖かく、やさしく、丸みを帯びた人間性が伝わって、ほんとうに心なごむひとときを過ごすことができました。今回、遠路ご出席いただいた田中先生、樋室先生が、当時と全くお変わりなくて、これが一番のおどろきでした。

長崎に戻る人とは、いつでも会えるなんて思いますが、これがなかなか会えないものです。長崎はそんなに大きな街ではないのですが、バッテリー会うということもほとんどありません。大阪まで出かけて、同窓の皆さんと出会うことの暖かさを身にしみて感じました。こんな風に日本中に南高の出身者がいるというのは「思い出共有族」とでもいうようなつながりのある存在が感じられ、何となくニンマリとするものですね。

今回、予期せぬ出会いもありました。今、高三の息子の幼稚園の時の先生に会えたことはうれしかったことのひとつでした。それに、今の私の活動に役立つ話がある方から専門的な内容として聞くことができたことも収穫でした。九州の端の長崎では講演会の講師としてお招きしないと聞けない話なども、あちこちのテーブルや楽しい二次会の場で聞かせていただき、大都会への人材集中を実感。

今後も機会あるごとに、長崎からでかけてみようと思います。“でしゃばりおばさん”を暖かく迎えて下さってほんとうにありがとうございました。

(第4回総会出席後の感想)

☆会費納入のお願い☆

本誌発行の諸経費、および長崎南高関西同窓会の運営費として、年会費(¥2,000)を同封の振込にて振り込み頂きますようお願いいたします。なお9月開催の総会に参加予定の方は、参加費に年会費が含まれますので振り込みの必要はありません。

私の為のチーム医療

西脇病院 西脇 健三郎 (2回卒)

久しぶりに映画館に足を運んで映画を観た。それは、第二次世界大戦下のポーランドで1200人を越えるユダヤ人をナチスのホロコースト(大虐殺)から救った一人の男の物語である。その男はドイツ人でナチス党員の実業家である。それもドイツ軍の侵攻に乗じてポーランドへ乗り込み、労働収容所のユダヤ人を低賃金で雇用し、一儲けも二儲けも企て、莫大な富を手に入れた人物である。加えて、女好きで、酒好きときている。そんな彼が■には、それまでに儲けて手に入れた富のほとんどを投げ出し、ユダヤ人救出のために奔走する。この実在の人物と出来事にもとづいて作られた「シンドラーのリスト」を観終わったとき、その男オスカー・シンドラーに自分自身を少しダブらせている自分に気付いた。

私自身、何か志を持って医師、精神科医になったわけではない。何のことはない、父が精神病院を経営していたからである。それも、別にそんな父の精神科医、あるいは病院経営者としての生き方に引かれたわけでもない。私がこの道を選んだのは、法外な富は手に入らないにしても、病院を引き継ぐことで得られる安定と、それなりに満たされた生活のため、ただそれだけである。もちろん女好きだし、酒も好きである。そして、そういったものを手に入れるためには、父の精神病院を継承した後、そんなに波風立たず、世間並のやり方で病院の運営をやればいいわけで、そんなに難しいことではない。つまり、父の病院精神医療に徹すればいいわけである。

しかし、何時の頃からか、私はどうも攻めの病院精神医療を始めてしまったようである。そのため、とにかく忙しくなった。そんな忙しさの中で「どうもこれは俺の願ってきた生き方とは違う」と時にぼやきながらも、何かわけの分からない力に駆り立てられながら、今も攻めの病院精神医療を心ならずも続けている。シンドラーにも同じような葛藤があったようである。それは、映画の中で、スピルバーグの巧みな演出とリーアム・ニースンの見事な演技で表現されている。



ただ私は、決して私財を投げ出してまでというようなことはしないだろうし、したくもない。それは、時代が違う、直面している問題が違う、そして、シンドラーと私との人間としてのスケールの違いでもある。確かにそんな違いが、私財を投げ出す、といったことをさせないでいるのかもしれない。では今の時代にも、一人の偉大な善意や優しさがまだ必要なのだろうか。それを必要とするときもあるかもしれない。が逆に、必要としないときもある。必要としないとき、それは、もっと効果的で確実な援助の手段を、一人の偉大な善意が阻害するときである。私たちの(精神科)医療の世界では、最近よくチーム医療という言葉を目にする。それは、善意や優しさを内に秘めた様々な技能、技術が結集され、より効果的で確実な医療サービスを提供すること、と私は理解している。

精神科医療で、そんなチーム医療が形となって表われたとき、それはディケアであったり、作業療法だったり、SSTといったものであったりする。そんなチーム医療を形として作る決断を下すとき、あるいは作り上げるまでは、ひょっとして一人の偉大な善意を必要とするかもしれない。しかし、それが形となって活動し、機能を始めたら、もう一人の偉大な善意は必要としない。何故なら、そこでは、一人の偉大な善意より、様々な技能、技術の結集が必要とされ、むしろ、一人の偉大な善意は、ときとして、そんな様々な技能、技術の結集とか、その表現を阻害することがあるからである。これから先、長崎県下の精神科医療の世界でも、そういった偉大な善意(難解な言葉を使用することで偉大にみられることもある。)に阻害されない、効果的で確実な医療サービスを提供しうるチーム医療が確立され、機能し、それがあたり前になったとき、私を駆り立ててきた不思議な力は、多分その力を失ってくるはずである。そうなったときに初めて、私の初期の目的である、それなりに満たされ、安定した「酒とバラの日々」を迎えることができるに違いないと思っている。

「人生はね、自分が困らない程度内で、なるべく人に親切がしてみたいものだ」

夏目 漱石「三四郎」より

荷物ば見とってくれんね

木田 恵美子 (旧姓：早川 10回卒)

時は昨年の春休み。所は長崎、駅前の県営バスターミナル。子ども達とともに帰省した私は、空港バスを降りた後、待合室のベンチに腰をおろしてひと休みしていた。ひとりのおばあちゃんが、前のベンチに荷物を置いた。おばあちゃんは、何やら落ち着かない様子でその辺をウロウロしていた。

私が、子どもの荷物を整理していると、頭の上からおばあちゃんの声がした。「ボク、ちよっとこの荷物ば見とってくれんね。トイレに行ってくるけん。」

「ボク」と呼ばれたので、私はそのまま左隣にすわっている娘の顔を見た。小さい頃から「ボク」と呼ばれていた娘も、咄嗟に顔を上げて相手の方を向いたようだ。ところが、何か違うらしい。返事もせずキョトンとしている。「ならば、頼りないチビの方かな...」とウロチョロしていた息子を見たが、これまた、おばあちゃんの方を見てはいるものの、キョトンと突っ立っている。おばあちゃんが声をかけた相手は、息子でもないらしい。「じゃあ、誰？」私が顔を上げると、おばあちゃんと目

が合った。おばあちゃんの眼差しは、何のためらいもなくまっすぐに私に向けられていた。

「エッ、エーッ!?ボクって、まさか私のこと!?!」今度は私がキョトンとしてしまった。絶句!おばあちゃんの視線は力強く、少しも疑うことなく私に向かって「そう、アンタのこと」と答えていた。

「は、はい、わかりました。」と、あわてて応えると、おばあちゃんは安心した様子で、トイレの方に歩いて行った。

キョトンとしていた子ども達も、事の次第がわかったようだ。おばあちゃんの姿がトイレの入り口に消えるや否や、笑いが吹き出した。

紺のスタジアムジャンパーにジーンズ、スニーカーといういでたちでは、確かに男の子みたいだし、若く見られるのも悪くない。3人の中で一番頼りになりそうな者に声をかけたのもうなずける。でもね、おばあちゃん、いくら何でも、いい年の、それも母親をつかまえて、「ボク」はないでしょ!「ボク」は一。

娘:「ボクと呼ばれた母親は他にはおらん。」

妹:「あんたは年齢不詳やもんねー。」

思い出すたびに苦笑してしまう、忘れられない出来事である。おそまつな一席。

各地同窓会の最近の活動

阪神大震災の被災者に対し、各地の同窓会で義援金を積極的に集めていただき感謝にたえません。関西同窓会の義援金をあわせて約70万円となりました。被災者の方へ早速皆様の善意をお届けいたします。

同窓会本部

震災募金10万円と活動費10万円が送られてきました。

福岡同窓会

6月3日第5回総会を天神にて開催。恩師7名、同窓生100名が集いました。

関西同窓会の震災募金として、25,750円集まりました。

関東同窓会

6月3日第5回総会を竹芝にて開催。震災の募金活動を行い、関東同窓会として30万円が送られてきました。

長崎南高関西同窓会事務局

〒530 大阪市北区西天満3-6-3 西天満福岡ビル4F

松本法律事務所内 松本 藤一 (2回卒)

TEL 06-365-6445 (代) FAX 06-365-7081